



私は苗苗のために何枚か写真を撮り、また弟や妹達も一緒に撮り、家族全員の写真も撮りました。けれども母親の姿はありませんでした。私は彼女も出てきて一緒に写そうと父親に言いましたが、‘老四’は断固として反対するので諦めざるを得ませんでした。私は、苗苗が相変わらず一番小さい弟の傍を少しの間も離れないのに気が付きました。彼はもう思うまま走り回るようになったにも拘らずです。

苗苗の家の貧しさは言うまでもなく、母親は病気で、子どもたちはまともな衣服は一枚もありませんし、‘老四’は真面目に農作業をしていません。しかし、黄土のこの土地で6人分の口を養い、加えて4人の子どものための学費を捻出していくことは本当に容易なことではありません。‘老四’の生活はとても厳しいのです。何年か前に5番目の子どもである男の子が生まれましたが、養育できないと人を介して河北省の知り合いに貰ってもらいました。恐らく子どもを貰い受けた人は幾ばくかのお金を渡したことでしょう。それで‘老四’は悟るものがありました。

この何年間か、彼の連れ合いは殆ど毎年のように子どもを生み、死んで生まれなければすぐ人に手渡しているとのこと。二嬢と呼ばれる女の子はお母さんが2人の女の子と1人の男の子を産んだのを見たと言っています。可哀相な母親は、お産婆さんの手も借りず、自分の家のオンドルの上で生んだのです。ある時、‘老四’が外出している時に産気づき、子供たちを吃驚(びっくり)させました。血と肉の塊のような嬰兒(あかんぼう)はオンドルの上に放って置かれたままで、‘老四’が家に戻ってきた時は嬰兒(あかんぼう)はもう死んでいました。

‘老四’とお母さんは2人とも顔立ちが良いので、子供たちは皆とても健康で可愛らしいです。特に、チビの二嬢は顔だちが益々はっきりとして来て、笑えば愛さずにはられません。それに比べると、苗苗は大人びて少々年齢に相応しくなく、カメラを向けて笑うように呼びかけてもどこか無理があります。仕方がないことです。

ある日、私の学生から電話があり、大学を間もなく卒業するので、衣服を少々処分したいと言ってきました。私は黄河河畔の人たちの生活は厳しいのでそれ

らの衣服を或る貧しい家に送って欲しいと伝えました。私が‘老四’に‘どうですか?’と訊ねると、‘老四’は当然ながら是非にとのこと。しかし荷物を送るには姓名を書かなければなりません。私が彼に本名はなんというのか訊ねますと、出まかせのように「‘老四’だよ。劉家村の‘老四’といえばこの人はみな知っている」と言います。私が真顔で、「姓名は書かなきゃ」と言うとやっと劉世亮だと答えました。

‘老四’は生活について全くといっていいほど気にかけないのですが、苗苗の方は一生懸命です。ある時、彼女は隣のオバサンに言ったそうです。「お父さんは私が大きくなったので勉強する必要はない、家のことをしなさいと言ってるの。」しかし、苗苗は学校で自分に権利があることを知ったのです。「でも、法律があるから私を学校に行かせなければ、お父さんを訴える。」苗苗は真顔だったそうです。

14歳の少女はやっと小学校4年生として勉強しています。町の同年齢の子供たちは恐らく中学生になったでしょう。貧困が苗苗の前途を山のように立ちふさいでも、賢い苗苗が自分の努力で切り抜け、きっと明るい未来を創り上げ、自分の居場所を見つけることが出来るようにと私は心底から祈っています。(田井訳)

